



留学報告 「胎児治療の最前線を訪ねて」

千葉大学医学部6年 林 伸彦

〔留学先〕 Fetal Care Center of Cincinnati, Cincinnati Children's Hospital, USA.

〔期間〕 2010, March 14-21

〔胎児治療の背景〕

近年、先進国における新生児死亡の原因の主体は先天性疾患が占めるようになってきている。これは、新生児死亡や出生後の障害を減少させるためには、積極的に出生前治療(胎児治療)を行うことが必要だという可能性を示唆している。特に横隔膜ヘルニアによる肺低形成や、大動脈弁狭窄による左心低形成などは、子宮内発育中に疾患も進行する病態のため、諸外国では胎児手術が行われている。しかし日本国内では未だ施行例がない。

〔目的〕

かねてから興味があった胎児治療の現場に飛び込み、その考え方や問題点など実情を知ることがを目的に留学した。



〔留学中の経験〕

手術見学

双胎間輸血症候群に対するレーザー治療を見学した。これは日本国内でも先進医療として一部の施設で行われている治療法である。世界中でCincinnati Scoreが、双胎間輸血症候群の治療方針を決める指標となっているが、実際にはCincinnatiではあまりスコアによって治療方針を決定していなかった。治療ガイドラインを提案するような病院は、道を造りながらまさに道なき道を走る立場なのだと感じ、非常に感慨深かった。

機会があれば開腹手術や遺伝子治療なども見たかったが、訪問期間が短かったため見る事ができなかった。しかし全症例、手術記録動画があり、それを自由に見ることができた。動画であったが、その光景は大変衝撃的で心動かされるものであった。



家族説明への同席

専用の面談室が用意されており、MRI画像、超音波画像など、全ての画像を一枚一枚丁寧に説明していた。症例は、Cloacaや多発奇形、二分脊椎など多種多様であった。当然患者のほとんどは、我が子の問題点を指摘され泣き崩れていたが、治療法があるのなら、それが100%なものでもなくても助ける努力をしたいという両親が多かった。

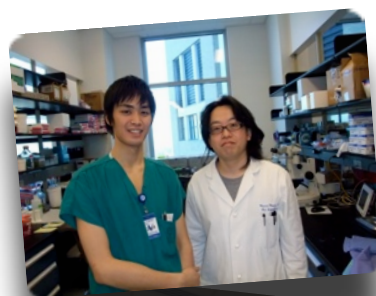
カンファレンスの見学

欧米では標準治療になりつつある胎児治療だが、やはり治療適応の有無は慎重に検討されていた。胎児治療やってるからいつでも治療しよう！ではなく、当然母体保護が最優先であり、出生後にどの程度機能異常が生じそうか、その両親の社会的レベル、金銭面などから子育てが可能かどうか、そもそも治療効果が期待できるかななどを、胎児治療グループだけでなく、Social worker, Gene

therapist, Pediatric surgeon, General surgeon, Obstetricianなどを交えて議論していた。それぞれの職種が信頼し合って、責任を持った発言をしていて、これこそがチーム医療なのだと理解した。

### 研究室訪問

研究室メンバーは日本も含め様々な国から来ており、各国の胎児治療の現状や、人工妊娠中絶の実情を聞くことが出来た。驚いたのは、国によっては中絶に週数制限がなく、そのことも胎児治療の普及に関係があるということであった。40週でも人工妊娠中絶できるということは、単に中絶が増えることを意味するのではなく、治療の失敗を覚悟で胎児治療を行う後押しにもなっているようだ。万一手術が失敗したら妊娠中絶をするという意味である。このことの倫理的是非はおおいに議論の余地があるが、外国の実情を知ることによって、国内の母体保護法の問題点や意味について考える大変いい機会になったと感じている。日本はこの分野について単純に遅れているというのではなく、そこには社会的背景や国民性、倫理観が存在するので、焦らずゆっくり成熟すべき医療なのではないだろうかと感じた。



### 〔反省点・感じたこと〕

僅か1週間の留学であったが、胸を張って「留学」と呼べるだけの内容だったと自負している。何らかの留学プログラムを利用するのと比較すると、準備期間も滞在期間も短いし患者も持たないしと、内容が薄いのは否めない。しかし自分の興味のある分野、とりわけそれが国内では未発達な分野であれば、自分自身で飛び込む価値は大いにあると感じた。

医療の内容や統計学的な現状については、論文や人の話を介して知ることはできるが、その医療が持つmindは、現場に行ってみてこそ初めて感じるものだと痛感した。たとえば今回留学するまでは、胎児治療を受ける患者はどのような気持ちでその医療を受けるのかとか、技術の発展が危険な医療を生み出しているのではないのかとか、そういった疑問や不安でいっぱいだったが、実際にその医療の現場を自分自身で感じることによって、そうした漠然とした疑問や不安はなくなったように思う。

### 〔留学まで〕

周産期母性科の長田久夫先生、井上真理子先生のご尽力にて、現地のProfessorの許可を頂き、見学させて頂く運びとなった。準備は、宿と航空券の手配、immunizationに関する書類と、実習にあたっての誓約書の記入くらいであった。留学中に他にもたくさんのお見学者や実習者と出会ったが、彼らは1ヶ月～1年というもっと長い単位で滞在しており、USMLE Step1のスコアに応じて、手術に参加したり患者を持ったりできるとのことであった。

### 〔後輩に向けて〕

身を持って感じたが、医学は共通言語である。日本の医学生というだけで患者も医師も信頼してくれ、伸び伸びとたくさんのお話を学ぶことができた。誰もが留学をした方がいいとは全く思わないが、海外の医療を見てみたいという想いがほんの少しでもあるのならば、是非留学をして欲しいと思う。そして留学のチャンスはどこにでも転がっているものだと思う。今回必要だったのは留学の話が出たときに「Yes」と言う勇気だけであった。たまたまYes manという映画を見た翌日で幸運だったと思う。

